

【研究ノート】広島県福山市における戦後直後の保育実践に学ぶ

小林 小夜子⁽¹⁾

広島県福山市は、昭和20年8月8日の大空襲によって焼土と化し、その1週間後には敗戦を迎えた。しかしながら、昭和20年10月4日には、福山市内の一部で保育を再開した。これは、戦後直後に日本国内においていち早く保育を再開できたことになる。その再開への取組や工夫について、当時の福山市立東幼稚園教諭であった徳良貞代の報告から読み解いたので報告する。まず第1に、幼児数に比べて少ない保育室を有効活用するために「二部保育」を採用したことであった。第2に、状況に合わせてできるところから臨機応変に対応するという柔軟性にあった。第3に、保護者や地域の人々の協力体制が大であった。それらの根底には、保育者自身が次世代の子どもたちを健全に育成したいという情熱が大きな要因としてあげられた。二部保育の実践からは、子どもの適応力がもたらされた。さらに、この時代に幼稚園・小学校の教育の一貫性や幼稚園年長児の義務化への構想がうかがえた。このように、戦後直後の保育実践の様子を知ることは、今後の日本における保育について一光を放つものである。

キーワード：広島県福山市、戦後直後、保育実践、二部保育

1. 背景

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2020年度以来、これまで経験のない状況に陥っている。大学では、対面授業が実施できなくなり、オンライン授業での実施を余儀なくされた。また、幼稚園や小学校、中学校は一時期全面休講となり、家庭で過ごさなければならぬ状況に陥った。何とか再開できないかと望みながらも一足飛びに解決されるものではなかった。このような危機的状況を歴史的に振り返ると、第二次世界大戦中・戦後のことがあげられる。おそらく、これまでの知見では計り知れないほどの事態が多かったことと推測される。

戦後の混乱期である危機的状況で保育はどのようになされたのか検討することは、現在のコロナ禍の状況変動の中でどのように対処しながら保育・教育を行っていくべきか検討していくことに何らかの示唆を得られるのではないかと考え、今後の非常事態体制下にお

ける保育に資することを願って、研究するに至った。

2. 目的

第二次世界大戦終了後、すでに76年経過した。我が国における保育の原点は、昭和23年3月に出版された『昭和22年度（試案）保育要領—幼児教育の手びき』（通称『保育要領』と呼ばれている）であるとされている¹⁾²⁾。小林（2020a）³⁾は、この原点である『昭和22年度（試案）保育要領—幼児教育の手びき』について保育の質と経済との関わりから考察を行っているが、昭和23年3月に『保育要領』が発行される以前の戦後直後の昭和20年に、広島県福山市では保育が再開されていた⁴⁾⁵⁾。

戦時中は、日本のいたるところで空襲の被害に遭い、多くの幼稚園が閉鎖されていた⁶⁾。広島県福山市も他市と同様に、昭和20年8月8日の大空襲によって焼土と化し、その1週間後には敗戦を迎えた。しか

⁽¹⁾福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: s-kobayashi@fcu.ac.jp

しながら、昭和20年10月4日には、福山市内の一部で保育を再開している⁷⁾。

戦後直後は、保育を行う精神的・物理的余裕がなかったことも報告されている⁸⁾⁹⁾。また、文部省の学制百年史によると、昭和24年以降に幼稚園は急増し地域によっては希望する幼児の全員を入園させることが出来なかったため、文部省は地方の実情に応じて二部保育や小学校の教室の利用などを配慮するよう各県に指導を依頼したとの記述がみられる。¹⁰⁾では、そのような状況の中で、福山市がいち早くいかに保育を再開できたかについて、文献を基に調査し、今後の保育に生かすべき点や学ぶべき点について考察することを本研究の目的とする。

3. 方法

文献研究を行った。使用した文献は、『徳良貞代 1948 幼稚園における二部保育の実際 幼児の教育 47 (10), 20-24.』¹¹⁾である。本文献は、1948年のものであり、現在においては不適切な語句（例えば、「父兄」等）の記載が見られるが、原文の歴史性を考慮して、そのままとした。また、原文は縦書きであるため、引用箇所の数値はそのまま漢数字を用いた。さらに、送り仮名も原文のままとした。ただし、旧漢字については、新漢字に改めた。また、踊り字についても現在の表現に改めた。さらに句点「、」を「,」に改めた。

4. 結果

本文献には、20-22ページに『幼稚園における二部保育の実際』と題して「福山市立東幼稚園 徳良貞代」が寄稿されており、残り23-24ページには『徳良さんの報告をお願いしたに就てママ』と題して「倉橋惣三」が寄稿している。すなわち、本論文は倉橋が徳良に寄稿をお願いして報告されたものである。倉橋は、寄稿をお願いした理由について、次のように述べている。

奈良の大会で発表された多くの貴重な報告の中で、私の最も強い関心を引いたものの一つは、福山市の保育の目ざましい努力であった。その努力の一つは、全市小学校に幼稚園設置の実現と計画、一つは、徳良さんの二部保育の実施と研究とである。同じく東京で、この二つの点に予て熱意を持ちつづけて来ている鎌田

しんさんが『先生、福山市では既に行われていますのです』と、喜びを以て語る興奮に促されて、その詳細の寄稿を徳良さんをお願いしたのである。(p. 23)

福山市での保育再開の経過と二部保育の必要性

福山市の保育が再開されたのは、戦後直後であった。

・・・(中略)・・・子供の楽園、市立幼稚園が再起を希う先生方の熱意に依って、市内西端の西小学校の一隅に再開致しましたのは20年10月4日でございます。(p. 20)

終戦の宣言からまだ2か月も経っていない。しかしながら、希望者全員が登園できたわけではなかった。福山市立西小学校は中心部から外れているため、行きたくてもいけない子どもが相当数に上り、行けない子どもに対して不公平でかわいそうという観点から、約1年後の昭和21年11月1日には福山市立南小学校と東小学校に幼稚園が併設開園されることとなった。

・・・(中略)・・・ところが南校の如きは全焼致しまして、当時は未だ学校自体が教室も不十分な状態にありましたので、幼稚園は講堂に衝立を持って保育室を作り、現在に至るもそのままの状態でございます。

東校は幸にして戦禍を免かれましたので、三教室を保育室として提供して頂き、そこに園児百二十四名を三名の先生で保育し始めました。然し日増に入園希望名が増加致しまして、このままでは到底希望の半をも満たすことが出来ず、折角の申込みをお断りするのも随分と心苦しい思いをしなければなりません。しかし何分にも市内で一番児童数の多い学校のことではあり、これ以上保育室の増加は絶対に不可能な問題で御座います。(p. 20)

・・・(中略)・・・ここに、是非にと望む親心と、子供の世界までも蝕ばれたいと思う先生の愛情とが、すべての悪条件を克服して。遂に二部保育を実施することになったのでございます。(Pp. 20-

21)

福山市立東幼稚園教諭であった徳良は、この実施した二部保育について、詳しく述べている。それによると、入園園児270人を6クラスに編成し、教諭1人、助教諭5人、園長1人（東小学校校長兼任）で保育を行っている。1クラス45人となる。保育室は3室しかないため、1保育室を2クラスで使用するしかないと考え、二部保育を実施したのである。一部は9:00~12:00まで、二部は13:00~16:00までであり、1週間ごとに交代する。このローテーションに対して子どもたちの抵抗は少なかったようである。しかし、午前組と午後組のつながりが悪かったため、それを解消する方策として、土曜日を合同保育の曜日としている。9:00から講堂で全クラスを1つにし、合同保育を行った後、各保育室に2クラスずつ入り、2人の先生が交代で当日の保育主任となり、保育を実施したのである。

二部保育による問題点

・・・(中略) ところがこの様に致しました始めの二三回は、子供同志の間で「ここは僕等の部屋だ」「うそだいぼくらの組だよ」とお部屋の争奪戦がございまして、「一緒のお部屋だ」と得心させるのに大変でございました。気の早い子供さんは、「今日は僕等は来る日ではなかった」と朝のうちに帰って仕舞ったり、女の子さんなどは来て見たら見知らぬお友達がいるものですから、毎週土曜日にはきつと泣いていると言うような光景が随所に見られまして苦心致しましたが、只今ではすっかり仲よくなりまして合同保育にしてよかったですと喜んでおります。只困ることは雨天の日にはまるで戦場のようでございます。下駄箱、戸棚等の備品が一組宛よりございませんので、長靴の整理、雨具の整頓に骨が折れました。お部屋遊びよりできませんので、四十五名でさへギリギリの保育室に倍の人数を入れるのでございますから、遊びの制限も止むを得ませんし、自由遊びを少くしてお話、紙芝居お唱歌等に偏って仕舞います。然し馴れるということは恐いものだと存じま

す。今では履物もよく自分でおならべできますし、雨具等も子供同志でどうやらゆずり合ってかけているようでございます。(p.21)

倉橋は、このような二部保育について、次のように懸念しながらも、大切な問題としてとらえている。

・・・(中略)・・・本来は普通でないことなのであるから、幼稚園は二部式でいいものと原則的に認めることは正しくない。・・・(中略)・・・家庭の不満のままに一般化するようことは、大きな不当であろう。殊に保育所などで、家庭の事情が大きな要素になっている保育事業の場合など、二部保育で、その任務を果たすことは出来ることではない。

が、現在の我国の実情において、二部保育の切迫感の免れない場合のあるもの、見のがせない現実であるとすれば、幼児保育の普遍の面において、一つの大切な研究問題といえる。(p.24)

二部保育導入による効用

保育者の成長という観点からの効用が見られている。

・・・(中略)・・・一保育室を二組で使用致します。時には同時に使う場合もあると思ひまして、経験者と未経験者と組合せました。子供の取り扱いに早く馴れて頂く点からも、保育内容の研究の上にも好都合であったように思ひます。(P.21)

・・・(中略)・・・小学校は実験学校になっておりますので、園長先生は大変おいそがしいお体でございますが、・・・(中略)・・・何かと寸暇を割いて幼稚園の経営に当たって下さいませ。小学校の先生方も全面的に御援助くださいませ。今や幼児教育の一大転換の時でございます。(P.22)

保護者の協力

・・・(中略)・・・父兄の方々も二部を承知の上でお入れになりましたので、そのために不平や不満の声はございませんが・・・(略)。(P.21)

・・・(中略)・・・母の会の方々が大変に理解を持って下さいますので、私達は安心して保育に邁進することができるのでございます。保育料保護者会費等の集纏も各町の役員の方々がして下さいます。又誕生会のお土産等の事まで全く我が事のようにしてお手伝い下さいますので、至らぬ私たちも励まされまして一生懸命でございます。(P. 22)

幼稚園の義務教育化をめざした意気込み

・・・(中略)・・・戦火に遭い全市を焼き払われた当市の現状に於きましては、新園舎増設は到底望まれません。それかと申しまして大切な幼児の教育を一日も忽せには出来ません。小学校の入学児童は年々増加致しておりますし、或は与えられた保育室も、もっと不自由になるかも知れないと思いますが、私共は二部でまだ足らなければ三部にしても、一人残らず幼児教育の恩恵に浴させたいと願っております。幼稚園を義務教育にするためにも。(p. 22)

徳良はさらに続けて、幼稚園から小学校への教育の一貫性について次のように述べている。

現在福山市には六校に幼稚園を併設致しておりますが、その学区学区の就学予定数を全部入園させております。従って、一年保育でございます。更に来年は残る四校に全部併設されることになっております。その中の三園が二部保育でございます。小学校併設につきまして全国保育大会の節、各県の状況を拝聴致したのですが、私の所は大変恵まれておりました、併設のための苦勞だけはございません。むしろ教育の一貫性の上からは併設こそ望ましいことであり、就学前教育としての幼稚園の成果をあげられると信じております。(p. 22)

5. 考察

福山市立西小学校が福山市で最初の保育再開であったが、「行けない子どもに対して不公平でかわいそう」という観点から他の小学校にも広げられたことは、子

どもの人権への配慮が感じられる。これは、昭和21年11月3日公布の日本国憲法よりも早いことが理解できる。

福山市立東幼稚園の実施には11月1日しか明確な日付はない。しかし、本文の記載内容から、昭和21年11月1日には、124人を3保育室に振り分け3人で保育を担当し、その翌年昭和22年4月には270人の入園児を6人の保育者で6クラスに振り分け3保育室で保育を実施せざるを得なかったため、二部保育に至ったのである。さらに昭和22年7月には、暑さのため夏休みに入るまでの20日間について午前と午後の二部保育を取りやめ、午前中に二部保育を実施している。すなわち、1部を8:00~10:00まで、2部を10:00~12:00までとし、保育実践している。夏休み後の昭和22年9月からは、午前と午後の二部保育に戻して保育を行っている。このように、状況に合わせてできることから臨機応変に対応していることが「二部保育」の導入によってうかがわれる。このようなことから、危機対応の一つとして、臨機応変の対応ということが求められる。そして、この二部保育導入に当たっては、保育者たちの情熱、つまり、何としても子どもたちに教育を受けさせたいという教育的動機である。純粋な教育的動機が保護者や地域を動かし、協力を得たのだと考える。この協力によって、保育者の重労働は精神的に軽減され、好循環につながったのではないかと考える。したがって、このような好循環によって、奈良の大会で発表をする運びとなったのではないかと推測される。

二部保育導入による問題点が指摘されていたが、結局、子どもたちは自分でできるようになったり、譲り合ったりすることが出来るようになっていく。子どもだからという理由で大人が子どもに対して何不自由なく関わることが求められがちであるが、大人が考えるよりも子どもはたくましく、適応力が備わっていることも理解できた。子どもにとって「良い保育」について、検討していく必要がある。

倉橋が指摘しているように、保育所における二部保育の導入は、成立しにくい。しかし、今回2020年から2021年のコロナ禍の状況を考えた時、保育所での保育実践の方法を考えておくことが重要である。密状態を避けるため、1クラスが2か所の保育室を使用する方法や、オープンスペース、遊戯室、廊下など少人

数で使用するなど、空間をどのように使用するか検討しておく必要がある。さらに、マンパワーを考えておくことも重要である。少人数での保育をする場合、2倍、3倍の保育者が必要になってくる。戦後直後の保育では、教諭は1人で、5人の助教諭^{注1)}とで、6クラスを担当していた。今後のマンパワーとして保育関連の退職者や潜在的有資格者の掘り起こし、また保育補助者の在り方など、いずれにおいても、危機に備え、いろいろな方策を検討しておくことが求められる。

さらに、福山市の保育界では、この戦後直後に幼小一貫教育の視点や幼稚園年長児の義務化が考えられていた。戦後76年経過した今日、保幼小連携という考えは大いに浸透してきた。しかし、連携という枠組みであって、一貫という枠組みにまでは至っていない。アジアのブータン王国では既に幼稚園年長の義務化がなされている(小林, 2020b)¹²⁾。日本国において、幼稚園年長の義務化の流れがないわけではないが、実現までには相当の時間がかかりそうである。いずれにしても、保育観や教育観を省察していくことが求められる。

注

1) 当時の「助教諭」については、文部省「学制百年史」¹³⁾には次のような記載がある。

制度創設の当初、幼稚園教員の資格を付与できる課程認定大学等の数が少なかったため、幼稚園教員の養成、確保は、高等学校卒業生に対する教育職員検定による臨時免許状の交付ならびに文部大臣の指定する幼稚園教員養成機関の卒業者に依存するところが大きであった。さらに、幼稚園のみならず、各学校においても助教諭等いわゆる正規の資格を有しない教員が多かったため、国は年次計画によって上級または異種の免許状を取得させるための現職教育を積極的に実施した。(p. 719)

引用文献

- 1) 文部省(1979). 幼稚園教育百年史. ひかりのくに株式会社. 331-338.
- 2) 坂元彦太郎(1980). 保育要領の作成. 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗(編). 戦後保育史 第1巻. フレーベル館. 30-43.

- 3) 小林小夜子(2020a). 戦後保育の出発点再考—『昭和22年度(試案)保育要領—幼児教育の手引き』の修正翻刻版の検討から— 保育学研究. 58(2), 31-42.
- 4) 水野浩志(1980). 幼稚園の普及状況. 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗(編). 戦後保育史 第1巻. フレーベル館. 64-74.
- 5) 徳良貞代(1948). 幼稚園における二部保育の実際. 幼児の教育. 47(10). 20-24.
- 6) 森上史朗(1980). 敗戦による衰退と復興への努力. 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗(編). 戦後保育史 第1巻. フレーベル館. 4-12.
- 7) 前掲5)
- 8) 水野浩志(1980). 幼稚園の教職員. 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗(編). 戦後保育史 第1巻. フレーベル館. 75-85.
- 9) 前掲3)
- 10) 文部省(1972). 学制百年史. 帝国地方行政学会. 870-872.
- 11) 前掲5)
- 12) 小林小夜子(2020b). 幸せの国ブータンの就学前集団教育に関する調査研究(報告)—私立幼稚園3か園の現地調査から— 福山市立大学教育学部研究紀要 8, 35-43.
- 13) 前掲10) 719.

(2021年10月19日受稿, 2021年11月24日受理)

【Research Notes】 Learning from Nursery Practice in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, Immediately after World War II

KOBAYASHI Sayoko⁽¹⁾

Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, was decimated by an air raid on August 8, 1945, and Japan surrendered a week later. However, on October 4, 1945, childcare was resumed in parts of Fukuyama City. This resulted in the resumption of childcare in Japan immediately after the war. In this paper, I report about the efforts and arrangements for this resumption of childcare as I read about it in a report by Sadayo Tokura, who was a teacher in Higashi Kindergarten in Fukuyama City at that time. First, a "two-shift nursery system" was adopted to effectively utilize the nursery rooms, which were fewer than the number of children. Second, responses to the situation were carried out in a flexible manner and adapted as needed. Third, there was a strong cooperative system between parents and teachers. A major factor underlying these efforts was the passion of the teachers themselves to nurture the next generation of children in good health. The practice of the two-shift nursery system ensured adaptability in terms of caring for the children. Furthermore, during this period, we could see the consistency of education in kindergartens and elementary schools and the concept of making older children in kindergartens mandatory. Learning how childcare was practiced in the immediate postwar period throws light on the future of childcare in Japan.

Keywords : Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, immediately after World War II, nursery practice, two-shift nursery system

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University